

口蹄疫を乗り越えて

中学校へ入学して間もないその日、恵子は朝から落ち着かなかった。いつもなら登校するとすぐに盛り上がるクラスメートのおしゃべりも、気が乗らない。

「どうしたの恵子。今日はなんだか元気がないね。」

心配して顔をのぞき込む友達の有香に、

「ちょっとね…。」

とだけ答えると、恵子はそっと自分の席についた。昨日見たニュースと父母の顔が交互に頭に浮かぶ。恵子は不安で胸がいっぱいになった。

「宮崎県で口蹄疫の疑いのある和牛三頭が確認されました。」

四月二十日の夕方。恵子が学校から帰ると、両親が食い入るようにテレビのニュースを見ていた。「まさか…。」
「どうしてこんなことに…。」父も母も次の言葉を失った。

恵子の家は、六十頭の牛を育てる畜産農家だ。祖父母の代から牛を育ててきた。恵子のアルバムには、牛たちと一緒に撮ったたくさんさんの写真が収められている。恵子が赤ちゃんの頃、祖父に抱かれていた写真にも、小学校に入学して大きなランドセルを背負っている写真にも、後ろの牛舎から、まるで恵子を見守るように見つめる牛たちが写っているのだ。普段、自分から進んで牛の世話を手伝えることはなかったが、生まれたときから牛たちとは家族同然に生活してきた。「もし口蹄疫が広がってしまったら…。」そう考えると恵子は気が気ではなかった。学校が終わると、「ごめん。今日は部活休むね。」とだけ有香に伝え、教室を飛び出していった。

家に帰ると、恵子は牛舎にいる父のもとへと急いだ。父はいつものように牛たちに餌をやっていた。

「おお、恵子。お帰り。今日は早かったね。」

変わらぬ父の様子に、恵子はほっとした。

「お父さん、昨日のニュース…。うちの牛たちはだいじょうぶだよね？」
「お父さん、昨日のニュース…。うちの牛たちはだいじょうぶだよね？」
恐る恐るたずねると、

「もちろんだよ。口蹄疫なんかに大事な牛たちを殺されてたまるか。」

普段は穏やかな父の表情が急に厳しくなった。

その日からしばらくの間、恵子は学校から帰るとすぐに、カバンを抱えたまま牛たちの無事を確かめるために牛舎へと走った。恵子の姿を見つけると、牛たちはうれしそうに、ひととき大きな声で「モオー。」と鳴いた。

「どうかこのまま、今までの生活が続きますように。」恵子は祈るような気持ちだった。

しかし口蹄疫の感染は瞬く間に広がり、全く収まる気配はない。恵子の住む地域でも感染を防ぐために、幹線道路には消毒ポイントが設けられ、学校などの公共施設にも消毒液が準備された。恵子の家でも、必死の防疫対策が始まった。家族は皆、買い物などの外出をできるだけ控え、やむを得ず外出するときは、帰宅後全身に消毒スプレーを浴びた。酢の入った消毒液はツーンと鼻をつく臭いがした。

恵子も学校から帰るとすぐに制服を着替えて、決して牛舎に近づかなかった。これまでは、毎日当たり前のようについていた牛たちと会えない日が、何日も続いた。牛舎から聞こえる牛たちの鳴き声が、いつもより遠く、小さく感じられた。

口蹄疫のニュースが流れて、約二か月が過ぎたある日。学校から帰宅した恵子は、息をのんだ。石灰がまかれ、真っ白になった牛舎が目飛び込んできたのだ。朝、家を出たときとは全く違う光景が広がっている。そして何より、いつもなら聞こえてくる牛たちの鳴き声が全く聞こえないことに、恵子の胸はざわざわと騒いだ。

「お父さーん、お父さーん！」

いても立ってもいられず、恵子は玄関に駆け込んだ。

「牛は？ 牛たちは？」

「今朝、みんな殺処分されたよ……。うちの牛舎でも感染が見つかったんだ……。」

恵子は目の前が真っ暗になった。父の言葉がすぐには信じられなかった。

「なぜ殺さなくてはいけないの？ 何も悪いことなんかしていないのに。家族みんなで頑張ってきたのに。」

一頭でも感染すれば、拡大を防ぐために牛舎のすべての牛を殺処分しなければならないことを、恵子は十分に分かっていた。それでも、牛たちの命を守りきれなかった悔しさで、恵子の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「口蹄疫は感染力の強い病気だ。感染が広がれば、もっと多くの牛たちが殺処分されることになる。」

父は静かに、恵子を見つめて言った。

「なあ、恵子。うちの牛もよそ様の牛も、同じように大切な命だ。かけがえのない牛たちを、もうこれ以上一頭だつて失いたくないんだよ。」

父の声はかすかに震えていた。先代から受け継いだ六十頭の牛たちは、祖父母の形見であり、家族であり、父の人生そのものだった。その牛たちの殺処分の受け入れを決断しなければならなかった父はどんなにつらかったことだろう。父の気持ちを見ると、恵子はもうそれ以上何も言うことができず、声を上げて泣いた。

それから二年の月日が流れた。恵子は中学三年生に進級した。自宅の牛舎には前と同じように、約六十頭の牛

たちが戻^{もど}ってきた。父と母は相変わらず朝から晩まで忙^{いそが}しそうだ。以前にも増して牛たちの世話に励^{はげ}む二人の姿から、父母の牛たちに対するより一層深い愛情を恵子は感じ取っていた。

「恵子、一緒に帰ろう！」

入学以来ずっと同じクラスの有香とは、学校から帰るのもいつも一緒。何でも話し合える間柄^{あいだがら}だ。

「もうすぐ三者面談だね。恵子は、進路どうするの？」

「うーん、悩^{なや}んでる。」

三年生になってからは、そんな話題が多くなった。

「今の成績じゃ、難しいんだけど。でもわたし、獣^{じゅういし}医師になりたいって考えてるんだ。」

かみしめるようにそう言うと、恵子は空を見上げた。

雨上がりの澄^すんだ空に、色鮮^{あざ}やかな虹^{にじ}がかかっていた。

